

立山を開いた人はだれ？ —立山開山伝説

芦峯寺や岩峯寺の集落に残る縁起などには、「慈興」というお坊さんが立山を開いたと記されています。

大宝元年(701)、文武天皇の夢の中に阿弥陀如来があらわれ、「今、越中の国は人びとの争いがたえず、人びとは苦しい生活をしている。四条大納言の佐伯有若を越中の国司にして治めさせれば、必ず、平和で豊かな国になるだろう」とお告げになりました。文武天皇は、さっそく佐伯有若を呼び寄せ、越中へおもむき国を治めるように命じました。そこで、佐伯有若は、息子の有頼とともに越中の布施の保伏山(現在の魚津市)に移り住みました【→有頼柳(権現柳)】。途中、砺波山を越え、越中国に入ったあたりで、どこからか白鷹が飛んで来て、有若の手にとまりました。それを見た有若は、「この国を治めることができよう」とおおいに喜び、大切に育てることにしました。

ある日、有頼は有若が大切にしていた白鷹を連れ出し、狩りをしていると、突然白鷹が南の方へ飛んでいってしまいました。有若に起こった事を詳細に話すと、有若はたいへん怒り、有頼は勘当されてしまいました。有頼は、親不幸の罪を悔い、「ふたたび白鷹を手に入れ、父親に許してもらおう」とあとを追いかけることにしました。

森尻の林で羽を見つけ、白鷹の行方を祈念したところ、森尻権現があらわれて「辰巳(東南)の山に分けはiri、尋ねなさい」と教えてくれました【→神度神社】。はるか彼方にある山を目当てに、山へと分け入っていくと、右手にするどい剣を持ち、左手に念珠を持つ老僧があらわれ、「私は立山の地主である刀尾天神にして不動明王である。あなたが尋ねる鷹は東にいる。心を改めて登るべし」とお告げになりました。

しばらくすると、白鷹を見つけました【→鷹泊の石碑】。そのとき突然、大きな熊があらわれ、白鷹は再び空へと飛び立ってしまいました。驚いた有頼は、「白鷹を捕まえられなかったのはこの熊のせいだ」と思い矢を放つと、みごとに熊の月の輪のところに矢が刺さりました。しかし、熊は矢が刺さったまま、血を流しながら、山中へと逃げていきました【→横江村、千垣村】。

「逃してなるものか」と、有頼は熊のあとを追いかけて山中へと入っていきました。

玉殿の岩屋という洞窟の中に追いつめた有頼が、そっと中の様子うかがうと、暗闇の中に黄金に光り輝く阿弥陀如来が立っておられました。しかも、阿弥陀如来の胸には、矢が刺さっており、血が流れていました。熊だと思って射った矢が阿弥陀如来に刺さっていることに有頼が驚き、悔いていると、阿弥陀如来は「あなたが嘆くことはない。私は、いのちあるものすべてに善悪をわからせ、迷いや苦しきから抜け出し悟りをひらくように立山に浄土と地獄をあらわした。しかし、いまだ登ってくるものがない。そこで、熊に姿を変えて、お前をここまで導いてきたのだ。立山への道をひらき、どうか人びとにこの立山へ登らせ、仏への道を成就させて欲しい」と命じました。

感激した有頼は、下山して「慈興」というお坊さんから教えを受けて僧となり、「慈興」と名乗り、立山を開いたといわれています。

●この開山伝説は、嘉永7年(1854)に玄清によって写された『立山手引草』(岩峯寺延命院蔵)の内容を要約して紹介しています。



立山を開いた「慈興」上人とは…

正徳3年(1713)成立の書物『和漢三才図会』や江戸時代に書かれた芦峯寺や岩峯寺の縁起には、「佐伯有頼」が立山を開き、慈興上人と名のつたとあります。しかし、慈興上人がどのような人物だったのか、また開山したのが大宝年間(701~704)だったのか、はっきりと示す史料はありません。京都の随心院の史料には、「佐伯有若」の名前が記されていますが、約200年後の延喜5年(905)の史料です。もしかすると、立山開山はこの頃だったのかもしれませんが。

また、鎌倉時代末期の書物『類聚既驗抄』には名前もない「狩人」、『伊呂波字類抄』には「佐伯有若」が開山したと書かれています。最初は、狩人や父の佐伯有若であった立山開山伝説が、江戸時代になって佐伯有若の息子・有頼が開山者とされていったことが考えられます。



開山堂
芦峯寺の雄山神社中宮祈願殿境内の高台にある。もとは、開山御廟の前にあったが、昭和40年ごろに現在の場所に移された。



立山開山御廟
慈興上人のお墓といわれている。



木造慈興上人坐像
国指定重要文化財、鎌倉時代制作、雄山神社中宮祈願殿蔵
高さ87.9cmで坐った慈興上人の姿。材料は立山杉といわれ、その木目があらわれている。

この像は、僕の83歳の姿だといわれているんだ。

